Reference data

脇　忠幸 (2014) 若者ことばから見る大学生の生活世界－授業実践報告も兼ねて－. In Reinelt, R.(eds.) Communication 2014. CAJcs, Matsuyama, p.19 - 30.

第16回CAJ中国四国支部大会
医療コミュニケーション教育研究セミナー（第８回）
2013.12.7-8

ナラティブにおける対人関係の複層性

福山大学人間文化学部
脇 忠幸

「ナラティブ（narrative）」とは？

会話中に登場する「物語」「物語る行為」のこと。
- 「昔話」
- 「昨日の飲み会の話」
- 「病い（illness）の語り」
  ～語りにもとづく医療（NBM; Narrative Based Medicine）

⇒日常的な行為。
～「物語る欲望に取り憑かれた存在」（野家2005）

ナラティブはおもしろい

ナラティブ≠事実の報告
話し手の主観的な「事実」「経験」

⇒語りの内容が「事実」であることを示す演出。
⇒過去の出来事を「再現」（≠コピー）するための手続き。

～「多元的現実（multiple reality）」（シュッツ1945）
～間主観性（intersubjectivity）

何を明らかにしたいのか？

★演出方法/手続きにはどのようなものがあるのか？
★どのように実践されているのか？
★「語る」ことで私たちは何をしているのか？　～なぜ「語る」？

目的①参与者間の複層的な関係性の記述
会話の参与者（2人）の関係は、ナラティブを通してどのように変容していくのだろうか。

目的②過去の「再現」を可能にする過程の解明
「再現」を成立させる言語的要素が、どのように用いられているのだろうか。

どうやって明らかにするのか？

- ●かつて筆者が参加した方言調査の録音データ。
  - ○2005年8月。山口県大島郡周防大島町沖家室島。
  - ○調査者は発表者自身（以下、W）。インフォーマントは当時84歳の男性Kさん。
  - ○半構造化インタビュー。
  - ○調査開始からおよそ30分経過した後の約12分間。
  - ○バイアス（意図的な誘導）は無し。
- ●語用論（言語学）と会話分析（社会学）
- ●質的で詳細な記述研究

分析と考察

順調に進む調査（質問-応答連鎖）・・・
⇒インタビュー調査「らしさ」
⇒「調査者-インフォーマント」という関係性

ところが、調査開始から約36分後・・・
K「僕なんぼに見えます？」←質問-応答の逆転
⇒発言権（floor）がKへ。二人の関係性に変化。

ナラティブ全体（戦争体験）を構成するいくつかの物語
「鉄砲の話」（29Ｋ～68W）←ここを中心に
「通信士としての日常」（152K～167K）
「訓練と銃剣の話」（186K～231W）

関係性の変容

（１）非経験者-経験者
29K:あ(.)h鉄砲の話じゃが.
（2.0）
30K:鉄砲の音で.
31W:うん.
（2.0）
→32K:遠くにおる(.)敵がおる近くにおるっちゅうことがわかるわけ.
33W:う：ん.
→34K:わかる？
→35W:さすがにそれはわかんないですよ.hhhな何となくこう
（0.6）
36W:その音の大きさってことなんですか？
37K:ん音がね？
38W:はい.
→39K:ピャッ(.)ちいうた場合は(.)近いわけよ。

説明のモダリティ「わけ」

自らを「非経験者」としてカテゴリー化

「非経験者-経験者」
「知識を持たない者-知識を持つ者」

「非経験者-経験者」「知識を持たない者-知識を持つ者」

ある出来事を直接目撃した者（ここではK）
物語る権限（entitlement）を持つ（Sacks1992）

経験の有無の顕在化
⇒非対称性の発生。このナラティブ全体（戦争体験）においても非経験者Wはあいづち程度で終始。

～聞き手も非対称的な関係構築へ貢献。

「知識を持たない者-知識を持つ者」

（２）知識を持たない者-知識を持つ者
77K:«たとえばよ？»
（0.8）
→78K:暗号士でもね
（1.6）
79K:あの：
（1.0）
→80K:師団司令部が(.)使う暗号はね：
（0.8）
81K:よん数字.
（0.6）
→82K:<いちに：さんし>(.)４つ
83W:はい
84K:数字やる(.)それからそのつ
（1.2）
→85K:中隊で使うやら師団で使うやつは(.)だいたい<さん数字. >

終助詞「ね」の使用
⇒「コンテクスト化の合図（contextualization cue）」（ガンパーズ1982）

速度を落とした発話
⇒スピーチ・アコモデーション「下向き集中」（downward convergence）
～教師と生徒

「教える」という行為/出来事

関係性の〈融解〉

二人の関係は「完全に」切り替わったのか・・・？
⇒No！

連続的
- 「調査者-インフォーマント」
- 「非経験者-経験者」
- 「知識を持たない者-知識を持つ者」

★関係性の〈変容〉というよりも、〈融解〉というイメージに近い。

視点移動と時間の往還

（３）話法と視点移動
→55K:だから「ピュ：：：ン」ちていうたら(.)「ははぁ：：：(.).h(.)何里先じゃな：」ちいうて=
56W:=うん.
→57K:「ヒュ：：：：ン」
（1.2）
→58K:「はぁだいぶ遠いな：こりゃまだ.」
59W:うん.

引用標識や述語動詞を含む直接話法

「声（voice）」（バフチン1963、Tannen1989）の「再現」

「場の二重性」（砂川1987、1988a、1988b）
現在：引用文そのものが発話される場
過去：引用文によって再現されている発話の場
⇒視点移動＝時間の往還

～「場の交換（trading place）」（Duranti2010、片岡2011）

時間軸の〈融解〉

（4）自由直接話法と歴史的現在形

203K:それから一時間ぐらい走って.

（1.2）

→204K:「よし(.)小休止.」

（0.8）

→205K:今から

（1.8）

→206K: 敵の捕虜を.

（3.2）

→207K:突く練習する」

（2.4）

208K:（はは柱へ）行ったら.

（0.8）

209K:捕虜

（1.2）

→210K:くくってる(.)「突け」hhhh

自由直接話法：引用標識などを用いず引用部のみを提示。
⇒会話の場面に物語の場を再現し、登場人物になり代わって演技する（砂川2003）。

歴史的現在形：過去の事柄を表す現在形。
⇒物語世界に視点が移動していることを表し臨場感を構成する（小玉2011）。

視点移動＋臨場感＝時間軸の〈融解〉

おわりに

W ⎡ 調査者 ――― インフォーマント ⎤
　 ⎢ 非経験者 ――― 経験者 ⎥ K
　 ⎣ 知識を持たない者―知識を持つ者 ⎦

⇒複層的な関係性。複層的な自己。
　～「フェイス（face）」（Goffman1967）

連続的で瞬間的。基層がない。
　⇒無根拠性＆不確実性。間主観の重要性。

参考文献

バフチン, M. (1963)『ドストエフスキーの詩学』（望月哲男・鈴木淳一訳1995）ちくま学芸文庫

ゴフマン,A.(1967)『儀礼としての相互行為』（広瀬英彦・安江孝司訳1986）法政大学出版局

ガンパーズ, J.（1982）『認知と相互行為の社会言語学　ディスコース・ストラテジー』（井上逸兵ほか訳2004）松柏社

小玉安恵（2011）「体験談における歴史的現在形の機能と視点」『日本語教育』148, pp.114-128.

串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析―「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版

西阪仰（2001）『心と行為』岩波書店

野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波現代文庫

大浜るい子(2004)「終助詞「よ／ね」の機能再考」―文脈指定機能」『広島大学日本語教育研究』14, pp.1-7.

Sacks,H.(1992) *Lectures on Conversation*. vol.2. Oxford: Basil Blackwell.

参考文献（続き）

シュッツ,A.(1945)「多元的現実について」『アルフレッド・シュッツ著作集第2巻 社会的現実の問題Ⅱ』（渡部光ほか訳1985）マルジュ社, pp.9-80.

砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能―引用文の３つの類型について―」『文藝言語研究 言語篇』13, pp.73-91.

砂川有里子(1988a)「引用文の構造と機能（その２）―引用句と名詞句をめぐって―」『文藝言語研究 言語篇』14, pp.75-91.

砂川有里子(1988b)「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9, pp.14-29.

砂川有里子(2003)「話法における主観表現」北原保雄編『朝倉日本語講座5　文法Ⅰ』, pp.128-155.

Tannen, D. (1989) *Talking voices: Repetition, diaglogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.